【シンポジウム「偶然性と必然性」提題】

西欧キリスト教思想における「偶然」と「必然」

―「告白」的文学における「回心」、「出会い」の物語り性の視点から―

阿部 善彦

はじめに―キリスト教思想における「必然」と「自由」の一側面

神学的には、「偶然」と「必然」というテーマは、これまで様々に論じられてきた。例えば、神が存在するならば、そして、その神が全知全能であり、世界がその全知全能なる神によって創られたならば、この世界における様々な出来事は、すでに、あらかじめ、神によって知られ、そして、神によってなされたものであると考えられる。

そうであるとすれば、世界のあらゆる出来事は、全知全能の神によって支配・統治されていると考えられる。さらに、そうであるとすれば、「偶然」にすぎないようなどんな些細な出来事も、つまり、「髪の毛の一本」さえも、というような、意図や目論見や企てというものと完全に無縁であるような瑣末な出来事も、すべては、神の絶対の認識、神の絶対の意志において、すでに把握され、決定済みの事柄であり、その意味で、すべては神の定めた理（ことわり）にしたがって生じていると考えられる。こうした、神、もしくは、絶対的存在（者）にもとづく一種の決定論に帰着する考え方は、キリスト教神学に限らず、古今東西の宗教・哲学思想に広く見出されるものであろう。

キリスト教神学に限ってみれば、キリスト教は、神をペルソナ的存在者として信じるものであるため、神と人間のペルソナ的関係、つまり、人間は一人ひとりの個的人格であり、それぞれの個的人格に対して、唯一的に向き合い応答する神という、神と人の応答的関係性が重視されてきた(1)。また、ペルソナ性は、とりわけ、西欧キリスト教思想では、「知性」（intellectus）や「意志」（voluntas）、「理性」（ratio）や「自由意志」（liberum arbitrium）

というような、「精神」（mens）の根本的能力を基盤として考えられてきた。人間は、そうした精神的能力を備えた存在として、他の同じく「魂」（anima）をもつ地上の生き物（動物や植物など）から区別され、特別な存在とみなされるのであり、そうした精神的能力に基づいて、自ら考え、自ら判断し、自ら行動する「自由」な存在者であると考えられる。

キリスト教的な創造論からも、人間がそうした「自由」な存在者であることが考えられる。キリスト教では、旧約聖書の創世記の記述に従って、神は、人間を、神に向けて、神に似た者として創造したと考える。また、神から直接に「霊、息吹き」（spiritus）を吹き入れられて生きる者となった存在者であると考える。人間は、神によって、神に向かって、神に似せて創られた全ペルソナをもって、神と関わる特別な存在者として立てられ、神もまた、人間に対して、全ペルソナをもって向かい、応答する、特別な関係者である。

その際、神は、人間を神の意志にただ従う存在として、いわば命令にただ黙々と従って行動するロボットのような存在として創らなかった。もしも、人間がロボットのような存在として創られていれば、この世界は、はるかに理性的で、調和的で、平和な世界であったとも考えられる。人間が神から与えられた精神的能力によって、ひたすらに、神の意志を理解し、神の意志を行うのであれば、そこには、よこしまな考えや行い、妬みや憎しみ、不和対立などが生じる余地はないはずである。神のはからいのもとに、地球上の一切の存在と調和した平和で安定した世界がそこに成立したはずである。そのすがたは、人間ではなく、宮崎駿の「天空の城ラピュタ」（1986年）に描かれるような、人間のいない廃墟となったラピュタの中で、のこされた鳥や動物たちと永遠に美しい園を守り続けるロボットに近いだろう。また、そうした、理性的にハーモナイズされた人間の国は、ユートピアのようであるが、伊藤計劃の『ハーモニー』（早川書房、2008年）が描くような一種のディストピアかもしれない(2)。

しかし、人間がそうした自由な存在であることは、先に述べた、神の絶対的な全知全能性に基づく、一種の決定論と、鋭い緊張関係を持つ。人間が神にそむき、罪を犯すことも、また、反対に、罪を悔い改め、神の意志に沿うことを行おうと努力することも、いずれも、神の計画において決定されたとすれば、神にそむき、罪を犯した責任は、そのように決定した神に着せられ、

また、どんな努力も、結局、神の定めによるものであれば、人間があえて自発的に努力する意味がどこにあるのだろうか。

こうした決定論は、中世においても盛んに論じられたが、最も特徴的で、決定的なかたちでヨーロッパの精神世界に登場したものとして、宗教改革期のカルヴァンの予定説を指摘できる(3)。カルヴァンの予定説では、人間のあらゆる努力に関らず、すでに、救われている人と救われない人が、決定されているとされる。神の永遠の決定を人間は知ることができないので、だれも自分が救われているか知ることはできない。それゆえ、大きな不安を抱える。カルヴァン自身は、自分が救われることに確信を得ていたが、他の多くの人々は、自分が救われるのかどうか、大きな不安を抱えていた。

どんな人間的努力も救いに結びつかないという考え方は、一見すると、大変、不健康なものに見える。しかし、カルヴァンは、そこから、それまでにない徹底した禁欲主義的職業倫理観を提示するに至った。救われるか否かはすでに決定しており、かつ、人知の及ぶところではない。しかし、知ることはできなくても、何らかの確信、予感を得ることはできるとする。それは、禁欲的に自らの職業に打ち込むことである。

すべての職業は神から与えられた天職、使命である。このことは、ルターも説くところであるが、カルヴァンはさらに進んで、贅沢をせず、怠けることなく働き、利益を得ること（金を儲けること）が、その仕事に励んだ証しであり、そうやって仕事に励み、利益を上げていることは、社会からその仕事が必要とされていることの証しであるとともに、神の意志に沿って生きている証しであり、救われるべき者に選ばれている証しであるとする。これに対して、怠け、飲酒、贅沢におぼれることは、神の意志にそむき、滅びるべき者に定められた証しであるとした。世俗の中で、仕事に励み、利益を上げること、つまり、金を儲けることが、そのまま、救済の証しであるとするカルヴァン派の倫理は、利益（金儲け）を罪悪視するそれまでのキリスト教倫理と一線を画する。利益、儲けた金は無駄遣いされずに、神のために用いるか、次の仕事の資本とすべきとされ、こうした、カルヴァン派のキリスト教的な職業倫理が、近代的な資本主義社会の倫理に大きな影響を与えたとマックス・ウェーバーは指摘している(4)。いずれにせよ、神の永遠の決定という、圧倒的で絶対的な必然性を前にして、なお、人間の自由、自発的努力、責任

の意味を明らかにした、カルヴァンの予定説及びカルヴァン派の職業倫理は、ヨーロッパのキリスト教神学における神の絶対性に基づく「必然」の理解の一つの究極的な形をなすものであると言える。

だが、本提題では、こうした神学的な「必然」をめぐる議論とは、別に、これまで十分に論じられてこなかった観点から、考察を進めたい。というのは、先に見た神学的議論では、「必然」と「偶然」という関係よりも、むしろ、「必然」（神の意志、神の予定）と「自由」（努力、責任）の関係が論じられており、「偶然」ということは十分に主題化されない。このことを踏まえつつ、本提題では、西欧中世キリスト教思想における「偶然」と「必然」の理解を、アウグスティヌスの『告白』（*Confessiones*）[5]を中心にして、「回心」と「出会い」の物語り性の観点から考えて見たい。それによって、先に述べたような、キリスト教神学では、十分に主題化できなかった、「偶然」についても、多くのことを論じることができると思われる。

1.『告白』の物語り性について—いくつかの確認

『告白』はアウグスティヌスの自伝的著作である[6]。ここでは、副題にあるように、「告白」的文学における物語り性ということに注目したい。

『告白』は、特に第1巻から第9巻までは、アウグスティヌスの生涯を辿る、自伝的著述がなされている。その自伝的著述の営みは、自己認識の作業である。彼は、自らの人生を振り返り、それを、神の前に、自己自身の前に、そして、著述を読む読者たちの前に、物語りつつ、明らかにする[7]。

過去を振り返る彼の〈まなざし〉は、回心後のものであり、自分自身の行状にきわめて厳しく、わたしたちは、ときに、そのあまりにも辛辣で、突き放したような過去の自分の描き方に、過去のアウグスティヌスと、それを想起して物語るアウグスティヌスの間の距離間をはかりかね、戸惑うこともしばしばある[8]。

さらに、ここで、物語ることと説明することの違いについても確認しておきたい。先に述べたように、『告白』は自伝的著作である。つまり、アウグスティヌスという人間がどのような人間であるのかについての、アウグスティヌス

自身の自己探究の書である。

ところで、人間とは何か、ということについては、わたしたちは、例えば、理性的動物であるというように、様々な定義などによって、「説明」することができる。しかし、「わたし」とはどのような人間なのか。さらに言えば、「わたし」とは「だれ」なのか、というように、問題が、自己自身の存在そのものに差し向けられたときには、様々な定義・概念などの助けを得て「人間」一般について説明できたとしても、今ここにこうして生きている「わたし」の存在を解き明かすには足りない。

例を挙げてみよう、たいていの場合、大学に入学したての、新入生歓迎会での、自己紹介がそうであるように、自分が理性的動物であるというような定義ではなく、自分の名前、出身地、出身校、そして、今ここにいる経緯などを語るのであり、親しくなってくれば、自分がどのように生まれたかという生い立ちや、その後の人生の歩み、そして、これからの目標などが、順を追って、過去から現在まで、そして、未来、将来に向かって語られる。

そこで語られることは、だれにでもあてはまる一般的な説明ではなく、きわめて個人的な語りである。「人生を語る」とか、「自分語り」という言葉が示しているように、「わたし」は、説明されるのではなく、語り、物語られるものである(9)。

『告白』に話を戻すと、アウグスティヌスは、その中で、人生に生じた様々な出来事に言及する。それらの出来事の細かい記述は、文学的虚構を含む可能性を排除できないにせよ、基本的に、実際に行われた、もしくは、生じた「事実」である(と受け取られる)。そして、その「事実」の積み重なりが、循環するようであるが、彼の生涯、彼の人生である。そうして、彼は彼の人生を物語り、それを、自分自身の前に、神の前に、また、読者の前に明らかにするのである。

それでも、多くの事柄が、省かれ、語られないままにされている。「わたしは多くのことを省略するが、それはわたしがあなたに向かって告白する必要を感ずるものに急ぐからであり、また、わたしは多くのことを記憶していないからである」(III, 12, 21)。こうしたことわりの言葉が本文中にしばしば現れる。

その中で、語られる出来事には、語られるだけの「意味」がある。その反対

に、〈はじめからおわりまで〉、というひとつの有限な枠組みの中で物語る上で、明らかに「意味」のないもの、相対的に「意味」のないものは、その物語りから、すくなくとも、その言語化の作業から、取り除かれていると考えられる（もちろん、重要な事柄であっても、あえて語られていないものがある可能性も排除できないが）。

偶然とは、ここで、二つの仕方で区別できる。一つは、まったくとるに足らない事柄として、物語りに現われることのないものである。アウグスティヌスは、何月何日に、自分がどのような食べ物を晩御飯に食べていたかとか、そういった日記的・備忘録的事項を記述していない。肉を食べようとも、魚を食べようとも、それは、『告白』の物語りにおいて、「意味」を持たない、偶然的な出来事なのである。

これに対して、『告白』の物語りにおいて、決定的な意味をもつ、偶然的な出来事がある。それは、あらゆる人間的な目論見、思い、意図、意志とは無関係な出来事でありながら、同時に、アウグスティヌスの生き方に本質的に関わることになる出来事であり、物語りの中で重要な意味をもつ。

最も顕著な出来事として、アウグスティヌスが、キリスト教へと決定的に回心する、第8巻末の場面を取り上げることができるだろう。そこで、アウグスティヌスは、いつまでも思いきることができず、そうした自分に苦しみ、疲れ果てていた。自分の力ではもうどうしようもできないような泥沼に落ち込んでいる中で、彼に、こどもの声が聞こえ、それが「取って読め」（tolle, lege）と繰り返し歌うのを聞いた。この取るに足らないこどもの声が、アウグスティヌスに聖書を取らせ、そこで最初に目に留まった言葉によって、決定的な回心が成就したのであった（VIII, 12, 28-29）。

こうした偶然的な出来事が、物語りの中で、特に、様々な出会いと回心の場面において決定的な意味を持つものとして、しばしば、『告白』の中に登場する。以下、２．において、こうした偶然的な出来事について、さらに考察を進めてゆきたい。

２．物語りにおける「偶然」の意味について

もう一度確認すると、直前で提示した「偶然」の見方は、「偶然」と言われるものを、物語りにおいて語られ、その中で、一定の、もしくは、何らかの決定的な「意味」を持つ出来事と、物語りの中では語られない、ほとんど「意味」のない出来事に区別するものである。それでも、例えば、バタフライ効果として語られるように、たとえ人間に予測不可能であっても、とるに足らない小さな出来事（ブラジルの蝶の羽ばたき）が大きな出来事（テキサスのトルネード）と影響関係をもつとも考えられるように、すべての出来事は、説明不可能であっても、結局は、一定の因果関係にむすばれていると考えられるとすれば、まったくの「偶然」というものは存在しない、と言うこともできるだろう。

しかし、このことを認めた上でも、やはり、わたしたちが、普段、ある出来事を「偶然」という枠組み・フレームでとらえてしまっていることを打ち消すことはできない。むしろ、そうした出来事そのものの因果関係とは別に、ある出来事を「偶然」と見るわたしたちの了解を支えるものがあるとも考えられる。そして、それは、まさに、「予測不可能」、「説明不可能」であるということのうちにあるのではないだろうか。

「予測不可能」、「説明不可能」であるということは、わたしたち人間の、現時点での認識の可能性の限界を前提としており、その可能性に収まりきらない出来事に直面するときに、それを「偶然」と呼んでいるのではないだろうか。簡単に言えば、「思いもかけない」、とか、「思いもよらない」こと、「突然」のこととして語られるような出来事である。

ただ、予測不可能であったり、説明不可能であったりするだけではなく、加えて、そうした結果が生じるであろうことを「意図していない」、ということも重要な意味を持つだろう。例えば、論者が、先日、別の大学の男子学生から聞いた話であるが、彼は、一年前の授業中に、机の上の電子辞書を目の前の席に落としてしまった。そして、その電子辞書を拾ってくれた、ちょうど目の前の席にいた女性が、今つきあっている彼女であるという。

この話を例にとって、少し話を整理してみたい。彼は、前の席の女性とつきあいたいという意図を持って、電子辞書を落としたのではない。そういった意図・目論見なしに落としたのである。それこそ、たまたま、偶然に、電子辞書を落とし、たまたま、偶然に、その前の席にいた女性に拾ってもらっ

たのである。

たとえ、もし、この女性と近づきたいために、そういった意図・目論見をもって、「わざと」、「故意に」落としたとしても、電子辞書が落ちたということには変わりはない。むしろ、いずれにしても、腕か何かが当たって、そのことによって、当然のように、机から電子辞書は落下したのである。

この出来事が偶然であるか否かは、電子辞書が落ちた物理的因果関係によるのではない。落とそうとして落ちたのではなく、そして、彼女と付き合いたいから落としたのではないというように、「結果に対する明確の意図」がなかったかどうか、簡単に言えば、「故意、わざとではなく、たまたまそうなったのかどうか」、ということにかかってくる。

また、もし、男子学生が、わざと落としていたとするとどうであろうか。たとえ、結果が同じであったとして、両名が今同じように幸せであったとしても、「出会い」から始まる、その恋の始まり方の、しかも、「目に見えない」ちがいにすぎないことが、何か決定的に、その後の、二人の恋愛の全体像を大きく変えてしまうようにも見える。

さて、このことを踏まえて、ここで本題に戻ろう。つまり、「出会い」を物語る上で、「偶然」が重要性を持つことについて話を進めたい。もちろん、意図した出会いも、偶然の出会いも、出会いは出会いである。しかし、偶然の出会いが、意図した出会いと同じように、もしくは、多くの場合、意図した出会い以上の重要性を持つのはなぜであろうか。

ここでは、さらに例を恋愛場面にとって考えてみよう(10)。やはり、恋愛の物語りにおいては、「出会い」の、しかも、その偶然性が、ことさらに強調されることがあると言える。

例えば、「ラブストーリーは突然に」（1991年、小田和正）という歌では、「あの日、あの時、あの場所で、君にあえなかったら、ぼくらはいつまでも、みしらぬふたりのまま」とある。言ってしまえば、そのとおり、ごく普通のことを言っている。しかし、そこに、予期せぬ出会いの重大性が際立ってくる。つまり、あの日、あの時、あの場所で出会うまで続いていたそれまでの日常が、その出会いによって打ち破られ、そこに、突然に、二人の恋愛の物語りが、つまり、ラブストーリーが始まったということであろう。

近年でも、例えば、「君の知らない物語り」（2009年、ryo [supercell]）で、

「いつも通りのある日のこと、君は立ち上がり突然言った、今夜星を見に行こう」と冒頭で歌われる。このように、それまでの日常が、思いがけない仕方で、突然に打ち破られる出来事によって、一つの物語りが始まってゆくのである。

それは、意図された努力の結果ではなく、ある日、ある時に、突然に、自分の意図や努力の向こう側から、思いがけず、おとずれる、到来する出来事であり、その出会いを通じて、自分が意図していなかった方向へと決定的にその後の人生が導かれ、また、巻き込まれてゆく(11)。

突然の出会い、偶然の出会いは、それまでの日常の風景を打ち破る、新しい恋の物語りの幕を切って落とす。電子辞書を落とす。このことは、ただ、予測不可能、説明不可能であると断言することはできない。机の上にあれば、そこから落ちることもあるからである。しかし、二人がそれから相思相愛になることは、このときの二人の意図や思惑を超えている。この思いもよらない出来事、この「偶然」が、二人の出会いにとって、つまり、この二人の新しい物語りの〈はじまり〉にとって、そして、それは、おそらく、〈おわり〉まで続く物語り全体にとっても、不可欠なものとなっている。

ところで、本論の「はじめに」において、キリスト教神学における「必然」と「自由」（努力、責任）の対比的関係について見てきた。だが、ここでは、「偶然」と「自由」（努力、責任）ということが、むしろ、際立っている。

何かを、意図し、目論見、計画を立てて実行し、何かを目指して努力する。こうしたことは、人間の「自由」や、それを可能とする様々な認識能力、意志・欲求能力と切り離されない。それは、言ってみれば、トマス・アクィナスが人間の人格性を基盤にして説くところの、まさに「人間的行為」である(12)。

ところが、「偶然」の出会いは、この意志と知性をもつ人間の「人間的行為」の彼方にある。そして、この「偶然」が、『告白』では、その重要場面である、出会いや回心において決定的な意味を持ってくるのである。そして、ここにおいて、われわれは、「偶然」が、人間の「自由」を超えて、はるかに大きな意味を持ってくる可能性を考えることができるだろう。以下、『告白』における「偶然」と「自由」について、いくつかの考察を重ねてみたい。

3.『告白』における「偶然」と「自由」について

『告白』においても、もちろん、「自由」（努力、責任）とそれに基づく行動、判断について語られている。そして、実際に、アウグスティヌスが、幸福を手に入れるために、彼自身の「自由」（努力、責任）とそれに基づく行動、判断を積み重ねていったことも『告白』の中でしっかりと物語られている。

様々な挫折や苦しみ、悲しみに直面しながらも、アウグスティヌスの人生は、世間的な意味での幸福を手に入れているように見える。修辞学の教師として成功し、富と名声を得た。ローマ帝国、ミラノの修辞学教授として、貴族・上流階級の一員になるところまで行きついたのである。簡単に言えば、彼は努力と才能の人であり、人脈や機会も使って、一般市民階級の出身から成功を掴んだ。

『告白』の自伝的記述は、事柄から言えば、そうした古代末期ローマ帝国におけるばら色の立身出世物語りとも読むことのできるはずのものである（特に第7巻から第8巻）。しかし、『告白』には、立身出世を誇るばら色の調子が一切見られない。むしろ、物語りが進み、ローマ帝国、ミラノの修辞学教授として、貴族・上流階級の一員になり、富と名誉が約束されたところで、アウグスティヌスの悲惨さ、みじめさが、ますます際立ち、深まってくるのである[13]。

世間的には、成功の頂点と見られるところで、アウグスティヌスは、不幸の底に落ち込む。彼はそこで、それまでの自分が求めていたものが間違っていたことに気づく。だが、それだけならば、それ以前の挫折や失敗とかわらない。それだけではなく、彼はそこで、本当に求めるべきものが何であるかを、はっきり知るようになった。それは、回心して、キリスト者として生きる道である。

その希望は、『告白』冒頭部ではっきりと次のように述べられている。

「あなたは、わたしたちをあなたに向けて造られ、わたしたちの心は、あなたのうちに安らうまでは安んじないのである」（I, 1, 1）

キリスト教徒となり、神のもとに立ち返り、「あなたのうちに安らう」ことを求めて生きたい。こうした心からの希望を懐くようになった。つまり、心から、彼は「回心」を望むようになった。このように見ると、アウグスティヌスは、ようやく幸福を手に入れるように見える。だが、『告白』では、彼の本当の苦しみ、本当の不幸がここから始まるのである。

それはなぜか。今、ようやく自分が本当に望み、手に入れたいものを見つけた。しかし、彼は、どうしても、自分の力では、それを手に入れることができないのである。これまでのアウグスティヌスは、たとえそれが、結果として、自分の望むものではなかったとしても、自分の力で多くのことを実現してきた。自分の望みが、真実の望みではなかったため、そこでは、偽りの望みを手にしたに過ぎない。そして、今は、真実の望みを知った。だが、今度は、それを自分の手でどうしても掴めないのである。

先に見た、アウグスティヌスが、キリスト教へと決定的に回心する、第8巻末の場面は、まさに、そうした惨めさ、無力さ、苦しみの極致である。回心すべきとわかっていて、回心したいと願っていながら、どうしても回心できない。その自分の力ではもうどうしようもできないような泥沼に落ち込む中、こどもの声が聞こえ、それが「取って読め」（tolle, lege）と繰り返し歌うのを聞く。この偶然の出来事が、あらゆる自由や努力を超えて、アウグスティヌスに聖書を取らせ、そこで最初に目に留まった言葉によって、決定的な回心がついに成就し、その後の彼の人生を全く別のものに変えてしまったのであった（VIII, 12, 28-29）。

この究極的場面に集約的に示されるように、『告白』は、アウグスティヌスの人生を、むしろ、彼自身の「自由」（努力、責任）とそれに基づく行動、判断の積み重なりによってつくりあげられたものではないものとして物語るのである。「自由」（努力、責任）によらない、というとただの放任や無責任な態度として受け取られるかもしれない。だが、そうではない。そこには、「自由」（努力、責任）のぎりぎりの限界の、そのどうしようもなさの、身をもっての自覚がある。

『告白』は、先に述べたように、自己探究の書である。彼は、自己の人生を思い起こし、自分の意志や思いや目論見を超えたところで、自分の人生に関わり続けた神の導きを知り、神に導かれたものとして自己自身を、自分自

身の人生を物語る。

回心や出会いの場面で重要な意味を持つ「偶然」は、こうした、人間の「自由」（努力、責任）の限界を示す。そして、その限界の自覚が、神のはからい、神の業の偉大さの認識へと導く。『告白』全体は、自分の全人生を導き、変えた、そうした神の偉大さを認識し、それを賛美するための書である。このことは、その冒頭においてはっきりと示されている。

> 「『主よ、あなたは偉大であって、大いにほめられるべきです』。『あなたの力は偉大であり、あなたの知恵は測られない』。しかも、人間は、あなたの取るに足らない被造物でありながら、あなたを讃えようと欲するのです」（I, 1, 1）。

賛美と感謝の書としての『告白』にとって、人間の「自由」（努力、責任）の限界を示し、神の業の偉大さを認識させる「偶然」は欠かすことができない物語りの枠組みである。ちなみに、アウグスティヌスは、ここで、ただ闇雲に神を賛美しているのではない。

アウグスティヌスは、長い間、自分が本当にしたいことが何であるのかに気付くことができなかった。自分が本当にしたいことに気付いた後でさえ、それを十分に知って、しかも、それを強く望んだときでさえ、それを自力で手にすることができなかった。そこには、自分のあらゆる努力をもってしても、どうしても、その最終地点に到達することができないという限界の自覚がある。読者は、物語りを読む中で、この限界の自覚に寄り添わなければ、つまり、自由の限界にまで追い詰められ、その限界の彼方にあるものを、アウグスティヌスとともに見なければ、アウグスティヌスとともに、神を賛美する気持ちにはなれないだろう(14)。

結びにかえて—『告白』および古典的テキストを読む意味とは

最後にひとこと、さらに検討すべき課題について述べておく。先に述べたように、自分自身を物語ることは、自己探究である。そして、『告白』とは、

まさに、そうした自己を物語る、自己探究の書、古典である。

読者は、アウグスティヌスの物語りを通じて、自己自身の、〈わたし〉自身の自己探究へと進まなければならない。この書を、自己自身を認識するための〈かがみ〉として目の前に置き、自己自身の、〈わたし〉自身の自己探究へと進まなければならない。

同時に、物語りは、読み手を、その物語りの中に参加させ、物語りの中で語られる人物との同一化や模倣を促がす。よくできた物語りほど、読者を熱中、没頭させ、そうした同一化、模倣をいっそう強く促がす―〈創造的模倣：ミメーシスの問題〉―(15)。

しかし、それは、誰かの物語りを借りたり、盗んだりして、自分の物語りに置き換えることではない。物語りに固有な〈創造的模倣：ミメーシス〉と、物語りの借用・盗用には大きな違いがあることを自覚しなければならない。どこかのだれかのつくりあげた物語りをコピーアンドペーストして済ますことは、自分から自分の物語りを奪うことであり、つまりは、自己探究の可能性を閉ざし、結果として、真実の自己実現の可能性を閉ざすことである。

しかし、自分自身の物語りを語る、自己探究は、けっして簡単なことではない。そして、現代では、そうした難しい自己探究の必要なしに、簡単で、手軽に、大量にコピーされた、わかりやすく、とても魅力的な物語りを、商業的に獲得することができる。

例えば、家を買うとき、服を買うとき、時計を買うとき、結婚をするとき、恋人とクリスマスを過すとき、わたしたちは、自分で自分だけの本当の物語りを考えなくても、出来合いの、パッケージ化された物語りをお金と引き換えに、商品とともに手に入れることができる社会にいる。

こうした物語りが、大量にコピーされ、売買・消費される中でこそ、自らの物語りを、たえざる、自己探究を通じて語ることが大きく問われ、また、真実の自己探究の書としての『告白』と向き合う、現代的意味も出てくるだろう。そして、情報機器の発達とともに加速度的にメディア・コミュニケーションの可能性が広がる現代においてこそ、LINEをはじめ、ネットの海にあふれかえる、無限に自己増殖するだけの切れ端のような空虚な言葉ではなく、自分自身と深く向き合うことで、はじめて誕生する〈自分の言葉〉で自分自身を語り、かつ、それを自分自身で相手に伝える、〈真実の自己探究〉と〈真

実のコミュニケーション〉の可能性が問われていると言えるだろう（それは哲学の現代的課題かもしれない）。

そして、その際、本シンポジウムのテーマである「偶然」と「必然」は、「自由」とともに、自己自身の人生を振り返り、自分とは何者であり、何者となろうとしているのかを探究し、物語っていくために、重要な思考の枠組みを提供してくれるだろう。それらは、ごく簡単に論者の見通しを言えば、結局、〈わたし〉は、なぜ今こうして生きているのか、どうしてここにいるのか、何のために存在しているのか、などの根本的な問いに答えようとしながら、〈わたし〉とは何かを物語ってゆく際に、不可欠な思考の枠組み、物語りの枠組みなのだろう。

注

(1) 「個」をめぐる中世キリスト教哲学については次を参照。坂口ふみ、『「個」の誕生：キリスト教教理をつくった人びと』、岩波書店、1996年。C. モリス、『個人の発見：1050-1200年』、古田暁訳、日本基督教団出版局、1983年。

(2) 神は、人間を「自由」な存在者として創造した。自由であるがゆえに、その楽園で、女性は、蛇と話して、神から禁じられた木を見て、知恵と美しさに魅かれてその実を取った。（なお、これに対して、男性は、ただ、何の考えもなく、女性から渡されて食べている。フィリス・トリブル、『神と人間性の修辞学：フェミニズムと聖書解釈』、河野信子訳、ヨルダン社、1989年、168-171頁参照。）人間が、自動的に神の「禁止」にしたがう存在であれば、神にそむくことはなかったが、神は人間を自由な存在として創造したのである。旧約聖書は、今から、少なくとも、3000年以上昔にさかのぼるものであるが、人間を描くにあたって、まず、この神にも背きうる「自由」を主題化している。この創造の物語りは、現在のわたしたちにとっても、今なお、本質的な人間理解を照らし出ているのではないだろうか。

(3) 特に、ジャン・カルヴァン、『キリスト教綱要』（第三篇）、渡辺信夫訳、新教出版社、改訳版、2008年、第三篇第21章「永遠の選びについて」参照。中世キリスト教における「予定説」をめぐる論争としては、例えば、9世紀カロリング・ルネサンス期における、ラバヌス・マウルス（780年頃-856年）、エリウゲナ（810年頃-870年頃）、ゴデスカルクス（869年没）、ヒンクマル（806-882年）が関わった一連の論争をあげることができよう。

アラン・ド・リベラ、『中世哲学史』(*La philosophie medievale*, Presses universitaires de France, 1993)、阿部一智、永野潤、永野拓也訳、新評論、1999年、338-348頁参照。

(4) マックス・ウェーバー、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、大塚久雄訳、岩波書店、1988年。また、最近では、中山元訳、日経BP社、2010年がある。

(5) 原典は論者が愛用している羅独対訳版：Augustinus, *Bekenntnisse*, Insel, 1987により、巻・章・節数のみ記す。また、訳出に際しては、同じく次の日本語訳を適宜参照したことをお断りしておく。『告白』、『アウグスティヌス』(世界の名著：山田晶責任編集)、中央公論社、1968年。服部英次郎、『告白』(上下)、岩波書店、1976年。『告白録』(キリスト教古典叢書)、宮谷宣史訳、教文館、2012年。また、同じく、『アウグスティヌス著作集』(第五巻I-II)、宮谷宣史訳、教文館、1993, 2007年がある。同第五巻IIには『告白』に関する詳しい解説と研究書誌が紹介されているので参照されたい(497-628頁、pp. v-xii)。また、『告白』読解における参考文献としては、論者が比較的最近に読んで深い感銘を受けた、加藤信朗、『アウグスティヌス『告白録』講義』、知泉書館、2006年と、高校時代に『告白』とともに出会い、中世キリスト教哲学研究の途へと決定づけた、荒井洋一、『アウグスティヌスの探求構造』、創文社、1997年をあげておきたい。

(6) 「自伝的著作」とはいえ、単純に、自伝的著作としてのみ語ることの出来ない著作である。それは、この著作の表題である、「告白」という言葉、“confessio”という言葉の意味に基づく。そうした『告白』独特の特徴、そして、それが、この著作を、他に類を見ない古典的著作としているのであるが、ここでは、そうした問題に立入らない。(前註の加藤2006を参照されたい)

(7) 物語りについては、物語り論としてすでに様々な議論がなされているが、ここでは、簡潔に、物語りに〈はじめとおわり〉があることだけを指摘しておきたい。この自伝的部分の〈はじめ〉は、アウグスティヌスの幼少期である(もちろん、はじめ、ということでも、多くのことを考えなければならないのだが、ここでは立入らない)。しかし、〈おわり〉は、どうであろうか。この『告白』を書いていた時点で、アウグスティヌスの生涯は、まだ、終わってはいない。では、この物語りに、どのようなおわりをつけるのか。自伝的著述のおわる、第9巻では、彼を生んだ、母モニカの生涯とその死が語られる。彼の地上的な人生に始まりを与えた、また、彼のキリスト者としての人生にも、始まりを与えた、母モニカの死が、『告白』の自伝的箇所、第1巻から第9巻の締めくくりに置かれている。また、第9巻では、もう一つの「死」が決定的に語られる。それは、アウグスティヌスの「死」である。それは、古い人間が死んで、キリストにおいて、新

しい人間として「生まれる」という、「誕生」、「再生」と結びついた「死」である。アウグスティヌスは、それまでの自分、過去の自分に死んで、「キリストのうちに甦る」(IX, 13, 34)、キリスト者としての新生について語る。『告白』第9巻は「再生」(renasci)をはじめ、誕生や生むことに関する動詞が多く用いられている。それは、いずれも、後のキリスト教思想では「霊的誕生」(generatio spiritualis) と呼ばれるものに関係づけられる。例えば、母モニカについて、次のように述べている。「彼女は、わたしが、肉においてはこの世の光のうちに、霊においては、永遠の光のうちに生きるようにわたしを生み出した」(IX, 8, 17)。そうして、第9巻は、「死」のみならず、「再生」、「生」、「誕生」のモティーフに貫かれている。そこでは、母モニカだけでなく、アウグスティヌスの友人、ウェレクンドゥス、ネブリディウス、そして、アウグスティヌスの息子、アデオダトゥスの「死」についても言及される。彼らは皆、「霊的誕生」をもたらす洗礼を受け、神の子としての新しい「生」に「再生」した人々であり、いまは、この世を離れて、神の身許に召されている人々として、追想され、語られる。『告白』第9巻という自伝的記述の最終部は、こうした、いまは亡き人々への記憶に、特に振り向けられており、それは、神のもとでふたたびめぐり合う、その永遠の絆、復活の後に与えられる永遠の生命への信頼に貫かれている。その意味で、第9巻は、自伝的記述が締めくくられる〈おわり〉の物語りであり、そして、同時に、〈はじまり〉の物語りである。それは、その直前の第8巻末で、ついに「回心」して、キリスト教の信仰を受け入れたアウグスティヌスが、新しい人生を始める〈はじまり〉の物語りである。そして、このことが『告白』の記述をわたしたちが読み解く上で極めて重要な意味を持つ。なぜなら、『告白』の物語りは、古い自分に死んで、新しい「生」を生きるようになった、アウグスティヌスの視点から語られるからである。アウグスティヌスは、回心し、母の死をみとり、多くの人の死を過越し、新しい「生」を生きるようになった視点から、神への賛美と感謝をささげながら、自らの生涯を振り返り、思い起こし、それを自らの前に、神の前に、そして、わたしたち読者たちの前に提示するのである。

(8) 「わたしは、自分の過去の汚れたふるまいと、肉にまつわるわたしの魂の堕落を想起しようと思う。わたしは、それらの不潔なことを愛するからではなく、わたしの神よ、あなたを愛したいからである。わたしは、あなたの愛を愛すればこそ、そういうことをなすのである。わたしは、思い出のにが味をなめながら、わたしが迷ってきた邪悪な道を振り返る。いつわりのない甘美よ、あなたがわたしにとって甘いものとなるために、わたしがあなたという唯一のものに背いて多くのものの中に消えてゆく間に、ばらばら

に引き裂かれてしまった分裂から、わたしをあつめてくださるように、わたしは振り返る」（II, 1, 1）。

こうした『告白』の物語りの視点を、簡潔に、次のように整理してみたい。

・過去を振り返る〈現在のわたし〉の目線から、〈過去のわたし〉を物語る。
・〈過去のわたし〉の心境、見方、感じ方、考え方に沿って〈過去のわたし〉を物語る。
・〈過去のわたし〉と〈現在のわたし〉を導いている、見えざる〈神の摂理〉を物語る。

このうち、三つ目の視点が、「告白」であり「賛美」の書という、『告白』に独特の著作の性格にとって特に本質的なものである。こうした、重層的な視点から、〈はじめ〉から〈おわり〉に至るまで、彼の生涯に生じた様々な出来事が、出来事の順序としては、〈はじめからおわり〉という時間線上に回顧され、物語られてゆく。

(9) 例えば、20歳の若者がいて、その生きた人生の客観的な時間は20年、それ以上、それ以下でなくとも、それが、どのように物語られるかによって、「わたし」の人生は様々なすがたで現れ、また、物語り、また、物語られる、その都度ごとに、「わたし」が新しくとらえられる。説明であれば、不足ないものが一度与えられれば十分であるが、「わたし」の物語りは、時とともに変わり、そのたびごとに語りなおされる必要がある。

(10) なお、『告白』は、突き詰めて言えば、アウグスティヌスの神に対する賛美の書であるから、人間と神の関係を軸とするものであり、その関係性は、簡潔に言えば、人間と人間を超えた存在者との関係であり、図式化すれば、上下、垂直の関係性であると言える。同様に、簡潔に図式化すれば、人間と人間の関係は、その場合、水平方向の関係性として対比できる。そうであるとして、さらにつめなければいけないことが多くあるにせよ、中世キリスト教思想においては、多くの場合、この垂直方向の関係と水平方向の関係は互換可能であり、人間と神との間の人格的関係や愛の関係は、同時に、人間と人間の人格的関係や愛の関係に置き換えて考えることができる。ということで、ここでは、さらに例を恋愛場面にとって考え直してみた。

(11) わたしたちは、いろいろ計画通りに行かないことが多い人生であると言っても、それでもやはり、さまざまなことを計画し、予定を立てて、日々の暮らし、日常の生活を営んでいる。偶然の出来事、突然の出来事とは、そうした、計画や予定を、思いもかけないときとところで横切り、日常の生活の中に割り込み、時にそれを中断させる。これまで例に出した恋愛の物語り、ラブストーリーに、その構図は頻出するように見える。

(12) この点については本稿では十分に論じることはできなかったが、次の二書を参照。稲垣良典、『人格《ペルソナ》の哲学』、創文社、2009年。山本芳久、『トマス・アクィナスにおける人格（ペルソナ）の存在論』、知泉書館、2013年。

(13) 『告白』の前半部で語られるアウグスティヌスの生涯は、神から離れてゆく破滅の道を行く。それが、神からの離反であり、破滅であり、不幸であることを知っているのは、その後に、「回心」をして、神との一致の内に生きるようになった、現在のアウグスティヌスである。回顧される過去のアウグスティヌスは、特に、最初のほうでは、自分が、破滅の道を辿っているとさえ気付いていない。そして、幼少期、少年期のアウグスティヌスは、いま自分が求めているものが、そのまま、自分の幸福を実現してくれるものだと、疑っていなかった。しかし、経験を重ね、徐々に、彼は、自分がいったい何を求めているのか、今求めているものが、本当に自分の幸福を実現してくれるものなのか、逡巡し、自分自身に反問するようになる。また、同時に、自分が求めていたものが、結局は、幸福ではなく不幸の原因となるような経験も重ねる。しかし、それでも、自らの才能と努力によって、そのつど新たに、自分の道を切り開こうとする。そうして、自らの力で、その求めていたものを手に入れることもあるが、そのたびに、それが、本当に求めていたものではなかったことに気付く、苦い挫折の経験を重ねてゆく。その中で、彼は、自分がいったい何を求めているのか、そして、いったい何が真実の幸福なのか、ますます、わからなくなってゆく。ミラノの修辞学教授になっても、彼は、真実の幸福がなんであるのかわからないまま求め悶えていた。だが、その頃に、彼は、ようやく自分が求めていたものが、彼の幼少の頃から母モニカから教えられていたキリスト教にあると気付くのである（特に第8巻）。

(14) 賛美の書としての『告白』の物語り性を考察するための手掛かりとして、「悲劇」と「告白」の関係について、さらなるテキストの考証が必要であるが、一つの見通しとしてここに述べておきたい。まず、なぜ悲劇なのか。実際、悲劇はアウグスティヌスにとってなじみ深いものであった。『告白』では、かつて、演劇に熱中したことを回顧している。そして、彼がそこで語る演劇とは、もっぱら悲劇である。彼がかつて全身全霊で熱中したものが悲劇だったのだ。そして、同時に、この悲劇というモティーフは、『告白』において自己を回顧するアウグスティヌス自身の物語りの中にも入り込み、それ自体が主題的に考察されている。つまり、『告白』内部の自己探究、人間探究の中に入り込んでいる。彼は問う。人はなぜ悲劇に熱中するのか。それは誰かの悲劇に、つまり、誰かの悲しみに、甘い喜びを見出すことではないのか。それは、果たしてどのようなこ

となのか。悲劇に熱中する人でも、劇中と同じような悲しみが自分を襲うことは避けたいと思う。アウグスティヌスはこうして、自分がかつて悲劇に熱中していたことを回顧することから、悲劇そのもの、そして、悲しみそのものへの哲学的、人間学的考察を交えた自己探究に進んでゆく。しかし、その考察に立ち入らずに、ここでは、彼がそこで語ってはいない問題を指摘しておきたい。それが、つまり、なぜ『告白』は悲劇ではないのか、ということである。彼の生涯は本当の愛を見失った人生であった。神を見失うことは致命的な悲惨さである。そうであるにもかかわらず、『告白』はなぜ賛美の書であり、悲劇ではないのか。こうした問題について別の機会にさらに論じてみたいと考えている。

(15) ここで、創造的模倣：ミメーシスの問題にも触れるべきかもしれないが、今回は立ち入らない。

＊本稿は2013年12月14日に行われた国士舘大学哲学会・シンポジウムでの提題原稿にいくつかの加筆修正を行ったものである。あわせて登壇された二人の提題者、西山晃生先生、桑原俊介先生をはじめ、ご助言いただいた諸先生方、また、当日の討議に参加した学生諸君に感謝いたします。なお、本稿は、日本学術振興会特別研究員ＰＤ・研究奨励費と科研費（課題番号：１２Ｊ０７５０７）による研究成果の一部である。また、本稿の準備に際して、上智大学中世思想研究所の蔵書を利用させていただいた。